

誰でも学べる高齢者ケアの本質 『ユマニチュード入門』

本田 美和子, イヴ・ジネスト, ロゼット・マレスコッティ 著

評者: 藤沼 康樹 医療福祉生協連 家庭医療学開発センター長

フランス発の認知症高齢者ケアメソッド「ユマニチュード」の待望の解説書が登場した。

日本が人類史上経験し得なかった高齢社会を迎えるに当たって認知能などの機能低下のある高齢者の増加に医療・介護・福祉がどのような姿勢をもって臨むのかということに関しては、主としてヒューマンリソース等のシステムに関する議論が、現時点では多いように思う。そして、ユマニチュードのようなケアメソッドが、今あらためて注目されているのは、医療や看護の領域から具体的なケア現場への発信が、必ずしも十分ではなかったことが背景にあるかもしれない。

ユマニチュードという言葉は「人間らしさの回復」といった意味を持つ。そしておそらく、現象学あるいはメルロ＝ポンティの身体論などの大陸哲学の影響があると思われるが、人間らしさとは、他者と関係性の中で保証され、「立つ」という身体機能に多くを依っているのだという原理に基づいている。ユマニチュードは、その具体的なケアの実践体系である。

ユマニチュードの柱は、「見る」「話す」「触れる」、そして特別な地位を与えられている「立つ」の4つである。

「見る」については、特に視線をとらえることがキーである。「話す」ことは「あなたはここにいる」という表現をすることであるとされ、それゆえ喋らない人にも語りかけねばならない。「触れる」ことが脳にもたらす情報量の豊富さが示され、特に5歳の子どものくらいの力で触れることが強調される。そして「立つ」ことは人間らしさの根源に関わることであり、この立つ時間を確保するために他の3つの柱があるといっても過言ではない。本書は、これらが魅力的なイラストとともに、わかり

● A5頁 148 2014
本体 2,000円＋税 医学書院
ISBN 978-4-260-02028-2



やすい日常言語で説明されており、非常に読みやすい。

本書は病院や施設の高齢者ケアの現場を想定して書かれているが、評者のような地域の家庭医にとっても非常に参考になる。例えば、外来通院中のアルツハイマー病の患者で、診察室では無表情でいつも壁を見ているのだが、ある日評者が前方に回りこんで、視線をとらえて、「こんにちは～」と語りかけたところ、ニコッと笑顔になり、付き添って来られたご家族もびっくりされたという経験がある。また、在宅医療に携わる医師ならば誰しも経験するところだが、例えば病院入院中に誤嚥があったためベッド上で食事がとれないという評価で退院してきた患者が、必要に迫られて立位になったり、室内で少しの歩行を繰り返すことで驚くほど食事がスムーズになっていくことがある。感覚的に「立位」の意義はわかってはいたが、こうしてユマニチュードで強調されていることで再確認できた。

ユマニチュードで展開されているメソッドは、実際にはこれまで高齢者のケアに携わってきた優秀な専門職の間では常識といえる部分もある。しかし、その常識はどちらかというと倫理や価値観を基盤にしていたかもしれない。ユマニチュードはそれらを、理論的基盤から説き起こし、具体的に他者に伝えることができ、施設のシステムの改革に結びつけられる形に展開していることが新鮮である。

高齢者のケアに関わる全ての専門職の方たちに一読を薦めたい。